



## なくてはならぬものは唯一つである

八重樫 幸 蔵

今、私の目の前に一冊の本、三浦綾子著「氷点」が置いてある。「氷点」は、今から半世紀も前に朝日新聞が募集した賞金1千万円の懸賞小説入選作品である。著者の三浦綾子さんは、北海道旭川在住の無名作家であったが、この作品によって一躍有名作家の仲間入りを果たした。三浦さんは、熱心なクリスチャンであり、作品の背景には、基督教の概念である「原罪」が重要なテーマとして存在している。

1969年10月、当時、私が会員として在籍していた石川県金沢市の日本基督教団金沢長町教会は、創立80周年を迎えていた。その記念式典に三浦綾子さんを招聘して、記念講演会を開催することになった。

空港への送迎、講演会場への案内等、縁あって私が担当し、終日、三浦ご夫妻と行動を共にしながら、親しく創作にまつわる苦労話などを伺う幸運に恵まれた。

講演会の会場である北国新聞社の講堂には、700人に及ぶ聴衆が集まっていた。三浦さんは、長年の闘病生活の後に、一時は自暴自棄になりかけたりしながら、夫であり歌人である光代さんの励ましと信仰に助けられて、習作に明け暮れた日々の事どもを淡々と話されたのだった。病身の妻綾子さんに終始ぴったりと寄り添うようにして労っておられたご主人の光代さんの姿が、特に印象深く記憶に残っている。

講演会終了後、慌ただしく空港にお送りする車の中で、三浦さんは、私が用意しておいた代表作、「氷点」の表紙裏に、「なくてはならぬものは唯一つである。ご苦労を心から感謝申し上げます。三浦綾子」と、書いて下さり、数日後にはご夫妻連名でごていねいな葉書までいただいた。

1999年12月、三浦綾子さんは召されて天国に旅立った。

数年前の秋も深まった頃、夫光代さんが深夜のラジオ放送で、妻綾子さんの思い出を愛情あふれる口調で語るのを耳にした時、私は、「氷点」の表紙裏に認めていただいた「なくてはならぬものは唯一つである」という言葉が、聖書の中の言葉であることを知りながら探し出すことができなかったことを

思い出し、再び聖書を広げて探してみた。そして、それは、ルカによる福音書第10章42節にあることを発見した。現在使われている聖書では、「しかし、必要なことはただ一つである。…」と翻訳されているが、古い聖書では、「しかし、無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである。…」と、ほとんど三浦さんに書いていただいた言葉そのままに訳されている。

それは、あまりにも有名な、ベタニヤにおいてイエスがラザロ、マルタ、マリアの三きょうだいの家を訪ねた時の、イエスがマルタの不平に対して答えた言葉である。その時の様子は、17世紀にオランダで活躍したヨハネス・フェルメールという画家が美しい油絵で表現し、現在、エディンバラ（イギリス）のスコットランド国立美術館に所蔵されている。

今、私の目の前にある分厚い単行本は、1960年代に朝日新聞社から刊行された者であり、時代を象徴するように粗悪な紙に印刷されている。永年の保存に耐えて、書架の中で全体が陽に焼けて変色している。

裏表紙に小さく380円と印刷されているが、私にとっては忘れられない思い出を秘めた宝物となっている。



「マリアとマルタの家のキリスト」

## 「きく」と「はなす」

2011年11月19日 中屋 重正

東京・蒲田教会の林巖雄牧師のメッセージをお聞きして、私は次のことを思い出した。

「聞く・聴く」→「効く・訊く」；口を「利く」  
→「話す」→「放す・離す」

聞けども聞こえず、とは、聞いても「効き目がない」、即ち心が動かされて、行動に表れることがないことであり、話をするとは、「勇気を持って、言う気になる」こと、「自分が抱えている、重い思いを放す」ことである。真剣に聞いてくれる人がいなければ、真実を話すことは出来ない。

これは、私が教員になろうとしていた時期(1970年代前半)に出会った「からだとことばの会」で習ったことである。当時小学校の教諭であった、つるまきさちこ(参考①)さんが野口三千三(東京芸術大学教授)のレッスン「野口体操」(参考②)に出会ったことから、教育を見直す活動に広がっていたので、私も参加することができた。

その会には、野口氏に学んだ演出家の竹内敏晴(参考③)が講師として来て下さっていた。(氏は後に、林竹二学長の「公開授業」に立ち会ったりして、宮城教育大学の教授になられたので、有名になった。)竹内氏は、「体育」は目標を見誤っており、それは「からだ(躰)そだて」である、と言う。

その考え方に賛同したつるまき(鶴巻幸子)さんを中心に、有志グループ、教育に関心のある主婦や、教員、学生などが東京に年数回集まった。例会では、演劇レッスンを通して、お互いの人間性を確かめ合うことを話し合った。(私が高校教員になることを喜んで下さったつるまきさんは私の恩人のお一人であり、新潟県長岡市在住で、退職後は「柏崎刈羽原発」の停止を求める運動にも熱心に加わっている。)

当時は民間教育運動の変革期で、つるまきさんの勧めで、竹内氏は「からだとことばの会」のレッスン経験も含めて、著書『ことばが劈かれるとき』を出した。氏は幼い頃に耳を病み、難聴から吃音になり、青年期に「ことば」を回復する過程を苦労しながら体験した。声・躰を「劈(ひら)く」ということは、刀で「裂いて開く」ことを意味する。言葉を獲得することと同様、容易に「開かれる」のではな

い。氏は演出家として野口体操と出会い、演技する場を、それまで閉ざされていた「可能性をひらく」場として、自らのことばを「劈いて」いく。「こえ」と「ことば」に意味・機能を与えているのは、人間の「からだ」の生命行為そのものである、という。

さて、林牧師はメッセージ「いただいたものを用いる」(ルカ伝16章「不正な管理人」のたとえ：1節～)で、次の三点を素に語られた。

- 1) 間違いなく、私(達)は今ここに『居る』
- 2) 少なくとも、私(達)は『聞く』ことができる
- 3) さらに、私(達)は『祈る』ことができる

続いて林牧師が紹介して下さったのは、罪を犯して何度も監獄に入った男性についてである。その後、間もなく彼は十数度目の罪を犯した。そのことを新聞で知った或る牧師が彼に面会して、又々罪を犯したのは「刑務所に入るためであった」ことを「聞いて」、「今度出所する時には必ず出口に迎えに行く」と「話した」=約束した。今まで何度も出所したが、「誰も迎えに来ていなかった」からである。

誰にでもある気持ち、すなわち「誰かに聞いてもらいたい」という「訴え」と、「誰も相手にしてくれない」という「悲しみ」とを、共に担おうとしている牧師の「働き」を私達に取り嗣いで下さった。

竹内氏のレッスンでは「歌うことは何事かを聞き手に訴えることだ」とも教えられた。誰でも持っている「訴える」気持ちが、「福音」に出会って、「喜びの歌」=「讚美歌」となりますように。

林牧師が「間違いなく、私(達)は今ここに居る」事を前提としたことは、有名なマルティン・ルター言葉「われここに立つ、他はなしあたわず。神よ、助けたまえ、アーメン」を踏まえておられるのであろう。

イエス・キリストの名によって「父なる神様」と「対話」が出来ること、「きく、はなす」ことが「祈り」となりますように。

### 【参考文献】

- ① 野口三千三著『原初生命体としての人間』三笠書房(1975年刊)

② つるまきさちこ著『からだぐるみのかしこさを…… 新たな人間関係の創出へ向けて』新泉社 (1981刊)

③ 竹内敏晴著『ことばが劈かれるとき』思想の科学社 (1975刊)

関連聖句：

1) 「マルコによる福音書」4章9節より

そしてイエスは言われた。「聞く耳のある者は聞きなさい。」

2) 「ローマ人への手紙」10章17節より

そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。

(改稿・追記 2011年12月8日)

追記：クリスマスの「アドベント」を迎えて「ルカによる福音書」を第1章から読むと、「イエスの誕生」の前に、「洗礼者ヨハネの誕生」の次第が記されており、ヨハネの両親ザカリアとエリザベトが登場する。「聞く」と「話す」を考えるために、その部分を引用してみよう。(番号は節)

5 ユダヤの王ヘロデの時代、アビヤ組の祭司にザカリアという人がいた。その妻はアロン家の娘の一人で、名をエリサベトといった。6 二人とも神の前に正しい人で、主の掟と定めをすべて守り、非のうちどころがなかった。7 しかし、エリサベトは不妊の女だったので、彼らには、子供がなく、二人とも既に年をとっていた。8 さて、ザカリアは、自分の組が当番で、神の御前で祭司の務めをしていたとき、9 祭司職のしきたりによってくじを引いたところ、主の聖所に入って香をたくことになった。10 香をたいている間、大勢の民衆が皆外で祈っていた。

11 すると、主の天使が現れ、香壇の右に立った。12 ザカリアはそれを見て不安になり、恐怖の念に襲われた。13 天使は言った。「恐れることはない。ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリサベトは男の子を産む。その子をヨハネと名付けなさい。14 その子はあなたにとって喜びとなり、楽しみとなる。多くの人もその誕生を喜ぶ。15 彼は主の御前に偉大な人になり、ぶどう酒や強い酒を飲まず、既に母の胎にいるときから聖霊に満たされていて、16 イスラエルの多くの子らをその神である主のもとに立ち帰らせる。17 彼はエリヤの霊と力である主に先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する。」18 そこで、ザカリアは御使いに言った。「何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか。私は老人ですし、妻も年をとっています。」19 天使は答えた。「私はガブリエル、神の御前に立つ者。あなたに話しかけて、この喜ばしい知らせを伝えるように遣わされたのである。20 あなたは口が利けなくなり、この事の起る日まで話すことができなくなる。時が来れば実現するわたしの言葉を信じなかったからである。」

21 民衆はザカリアを待っていた。そして、彼が聖所で手間取るのを、不思議に思っていた。22 ザカリアはやっと出て来たけれども、話すことができなかった。そこで、人々は彼が神殿で幻を見たのだと悟った。ザカリアは身振りで示すだけで、口が利けないうままだった。23 やがて、務めの期間が終わって自分の家に帰った。24 その後、妻エリサベトは身ごもって、五か月の間身を隠していた。そして、こう言った。25 「主は今こそ、こうして、わたしに目を留め、人々の間からわたしの恥を取り去ってくださいました。」

(以上)

## 年の初めに思うこと

牧師 中原真澄

2012年が始まりました。けれども、もう何年になるでしょうか、年の終わりも始まりも、余り意識しなくなって長く経つように思います。

子ども(高校生まで)の頃は、クリスマス前から新年に向けて様々な準備が始まり、嫌でも年の終わりを意識したものでした。特に、中学生になる頃ま

では、母もまだ若く元気でした(といっても、50代にはなっていました)から、正月に向けて着物の洗い張り(今の人には分からないでしょうね。着物を一度ほどいて洗い、専用の板にピンと張り付けて軒先に立てかけて干すのです)や布団の打ち直し(綿は勿論フトン屋に頼んで打ち直してもらいま

すが、フワフワと膨らんだ綿を、洗ってのり付けした布団布に入れ直して縫う仕事があります)が師走の最初の行事でした。末っ子の私は、真綿を木綿ワタの上に伸ばしてくるみ、それをギューギューと布団用の布袋に詰め込んでいくのを手伝わされたものです。また、晴れた休みには畳を上げて庭に出し、半日乾します。急いで床板から昨年暮れに敷いた新聞紙を外し、ザッと掃いて荒拭きすると、新しい新聞紙を(湿気取りと風を防ぐため)敷き詰め、太い竿でバンバンと叩いて埃をたたき出した畳を敷き詰め、どかした家具を2人がかりで動かして元に戻します。

一番楽しかったのは、障子貼り。古くなって黒ずんだ障子紙を、この時ばかりは破いていいのです。拳を握ってパンパンと突き破り、一頻りやって満足すると、棧部分を雑巾で濡らして取れやすくした障子紙を、上から順に破り取り、改めて棧を丁寧なふいて古いノリを拭き取ります。緩く溶いて温めた糊を刷毛で塗り、下から順に障子紙を貼ります。広い家でしたから、張り替える障子は大小合わせて20枚はあったように思います(その頃住んだ家は東京・目白の大正時代に建った純和風。1階4部屋、2階2部屋のぐるりに廊下があり、廊下と部屋を障子で仕切る造り。移築以前は、別棟に台所や洗面所、トイレ、風呂等があり、繋いだ廊下沿いに棚や小部屋が並ぶ・そんな家でした)。

晦日になると、姉たちも動員されてお節料理づくり。私は周りでウロウロしながらつまみ食いするのが楽しみでした。それでも夕方になると、風呂炊きは小学校4年以降、私の仕事でしたから、庭の物置にある木材を引きずり出して鋸で切り、鉋を振るって薪にすることから始め、2時間近くかけて沸かすのが私の務めでした。いろんな仕事で汗をかいた体を、薪で沸かした風呂につけるのは、いま考えても気持ちよいものです。隣の家の子達も一緒に入ることもあり、それはそれで楽しい時間でした。

お風呂から出る頃には、晦日と大晦日は例年、新巻鮭をつかったお汁にご飯(あるいはお餅)の夕食。サッパリと野菜たっぷりの鮭汁に舌鼓を打つと、アア今年も終わりなんだなあ〜と、妙に実感したものです。

元旦の朝目を覚ますと、枕元には洗って袖や裾を伸ばした(昨春も着た)着物が、新しい下着と一緒にあります。綿入れを羽織って寝室を出ると、お雑煮の臭いがもう立ち始めています。アア、お正月が来た・白い息を吐きながらワクワクした思いを胸にお座敷に向かったものでした(決して、お年

玉が楽しみ・・というだけではなかった事は確かです)。

考えると、年を越す・・そのための様々な家庭の行事が、今の便利な時代になって消えていったことが、「新年」を迎える・・という意識を薄くしたように感じます。何かを終えて「越していく」感覚を持つには、それなりの過ごし方、やり方がある・・それはとても大切な成長の節々なのだろうと、今更ながら感じています。

もう一つは、牧師になってから余計に・・という事情もあるかも知れません。牧師という仕事(?)は、普通の仕事と異なって、年間や月間の行事もありますが、それより遥かに強く、週間行事で区切られています。日曜礼拝と水曜の祈祷会は、どんな季節であろうと、どんな祝日休日であろうと、毎週欠かさず巡ってきます。週のほとんど(とっていいでしょう)は、その準備で(少なくとも、心の思いのほとんどを)占められます。年末だろうが、年始だろうが、それは関係なく・・・。それもあってでしょうか、牧師になってから注連飾りなどを玄関やリビングに飾った記憶は、川崎時代の始めころの数年しかありません(クリスチャンが注連飾りなんて・・と思う方がいるかも知れませんね、特に門松は年の神の依り代一霊が下ってきて宿る/座る、物/場所一を意味しますから。でも私などは、日本に生まれ育った者として、こうした風習はイイものだ・・と知っているのですが)。忙しいままに、いつの間にか年が暮れて終わり、いつの間にか年が改まっている・・・そんな感じの毎年です。

旧約の時代、イスラエルの民は、7日の週(これはどうもイスラエル独自だったらしい)で区切る安息日の他に、奴隷の地であったエジプトからの脱出を覚え、その月を正月とし、記念していました。ただに新しいというだけではなく、歴史一それは、神による救いと祝福の記憶一を思い起こし、新たな祝福と導きを祈る、大切な祭でした。(調べてみたい方は是非、出エジプト記12章以下をお読み下さい。春の復活祭の頃、イスラエルは正月を迎えた訳です。日本でも、旧暦の正月は新春=春の兆しの訪れを祝う季節でした)。

私たちキリスト者は、イスラエルの民とは違い、振り返るべき民族的な救いとその歴史は持ち合わせていません。けれども、個々人が振り返るべき救いと導きの歴史は、やはり忘れてはならないものでしょうし、それが内に秘めている、国や民、全世界に及ぶ広がりもまた、忘れてはならないものでしょう。そのために私たちが為すべきこと・・それは、

惰性に流れている日々の流れを堰き止めて、溜まっている埃を叩き出し、新たな思いと感謝をもって主がなしてくださった業を捉え直すことなのではないか・・・かつての我が家での師走の日々を思い起こして、感じます。それがまた、迎える新しい年へ向けての、新鮮な誓いと思いと繋がっていくのでしょうか。「今年こそ・・・!!」そう誓った言葉も夢もな

かった今年（も）の自分を振り返りながら、忸怩たる思いをもってこの駄文を叙しました。まだまだエネルギー不足に陥りがちな私を、今年も祈りをもってお支え下さるよう、皆さんに心からお願いしつつ、終わりと致しましょう。



## シリーズ 『礼拝出席者の素顔』

### ～久保久子さんに聴く～

(教会来会者シリーズ2)

聞き手： 教会関係者インタビューシリーズの第二弾として、久保さんにご登場願うこととなりました。よろしくお祈りします。

久保： あら、いやだわ。何で私なの。私なんかちゃらんぼらんで、務まりませんよ。

聞き手： まあ、そこは、謙遜なさらずに、是非、季刊誌「うちまる」の存続にご協力下さい(笑)。

久保： そう、それならしょうがないかしらね。

聞き手： 久保さんは、生まれはどちらになりますか。

久保： 私は、年は言いたくないけど、大正15年5月1日、鳥取県の大山(だいせん)のふもとにある日野郡溝口町というところで生まれました。父は、たたき上げの職業軍人で、京都伏見区の陸軍師団司令部などに配属されていたように思います。弟2人の3人きょうだいでした。小学生の頃、父は満州に出征したのですが、やがて退役し、郷里に戻ってきました。とても、頑固で怖い父親でしたね。

聞き手： 職業軍人じゃ、きっと、そうでしょうね。

久保： 私は、地元の小学校の分教場や本校を経て、米子女学校に進みました。小学時代も毎日一里の道を通っていましたが、女学校時代も電車と1時間半以上の徒歩により苦勞して通学していました。冬季だけは、寄宿舎にはいりましたけどね。

聞き手： 久保さんが今こんなに丈夫なのは若い頃よく歩いたからでしょうかね。

久保： それはまちがいないですね。

聞き手： 久保さんの女学校時代というのはどのような時代だったのですか。

久保： 戦争もまだ一番ひどい時期ではなかったもので、一通り授業を受けることはできましたけど、そろそろ戦争色が濃厚になりつつあり、

昭和16年頃から配属将校がくるようになってたり、女子ながら匍匐(ほふく)前進の訓練があったり、皆で千人針を縫ったり、そんな時代だったですね。

聞き手： 女学校を卒業後は、どうなさっていたのですか。

久保： 父の知人の伝で代用教員となりましたね。鳥取県内の小学校で教鞭をとっていました。当時の教頭先生から板書の仕方やプランの立て方などを手取り足取り教えていただいたことを覚えています。終戦時は、夏休み中で、小学校で玉音放送を聴いたのですが、教頭が怒って電球をたたき割った風景が記憶に残っています。

聞き手： 久保さんもそのような形である戦争の時代を過ごされたのですか。それで、終戦後は。

久保： 丁度、その頃、母が結核で亡くなり、父が再婚したものですから、それを機に大阪の従弟や友人を頼って大阪市に移り、そこで教員の職を得ました。

聞き手： そうしますと、今のご主人とは、その後、知り合われたのですか。

久保： いいえ。実は、夫は、終戦後、鳥取の開拓研究所に勤めるようになっていたため、大阪に出る前に青年の交流会を通じて知り合っていたのです。ですから、私が大阪に出てからも文通を続けるようになったのです。その後、偶然の巡り合わせで夫の研究所が鳥取から神戸に移転となり、距離が近くなったこともあって昭和26年頃、結婚ということになったのです。やがて、夫との間には女の子2人と男の子1人が生まれました。

聞き手： それは、良かったですね。ところで、久保



さんと教会の出会いはどのような形で訪れたのですか。

久保 : 実は、神戸から広島県福山市に転居してからのことなのですが、神戸でもご一緒していた夫の職場の上司の奥さんに保田（やすだ）さんというクリスチャンの方がいらして、子ども達のために教会の幼稚園を紹介してくださるなど、何かとお世話になったのです。それと、女学校時代にさかのぼりますが、一学年上に熱心なカトリックの先輩がいて、とても親切にいただいたものですから、もともと教会やクリスチャンに対しては好意的な感情もありました。それで、保田さんに誘われて子ども達を教会学校に送り出したり、徐々に礼拝に出席したりするようになったのです。

聞き手 : 洗礼はどちらで受けられたのですか。

久保 : 実は、福山東教会に出入りしているうち、夫が東京方面に転勤となり、しばらくして私も夫の赴任先に移ることになったのです。そのときに、世田谷区の用賀教会を紹介されたのですが、転居を機に教会を離れてしまう人が少なくないということで、福山東教会の牧師から洗礼を受けて転出するように勧められたのです。

聞き手 : それで何と答えたのですか。

久保 : それは、困りましたね。私も決して確信を持って教会生活を送っているわけではないし、洗礼を受けるとなると抵抗がないわけでもありませんでした。そこで、思い余って、東京で単身赴任している夫に電話をかけて「私、どうしたらいい。」と相談したのです。

聞き手 : それで、ご主人は何と。

久保 : 夫は私に「信仰は、個人の自由なのだから、（洗礼を）受けようと思ったら、誰にも気兼ねせずに自分で決めなさい。」と答えたのです。

聞き手 : それは、その年代の男性としては、すばらしい応答ですね。

久保 : 私は、信念のない人間だと思いますが、福山東教会の牧師や役員、信徒の皆さんには本当に親身になっていただきました。そこに、夫の一押しもあって、受洗を決意したのです。

聞き手 : 久保さんが、この盛岡に来られることになったのはどうしてですか。

久保 : しばらく東京都内で生活していたのですが、昭和56年に夫が盛岡市にある東北農業試験場に転勤となり、それを機に私も盛岡に移っ

てきました。

聞き手 : 久保さんにとって盛岡はどのようなところですか。

久保 : 盛岡は、とても私の郷里である鳥取と似ていて、大山（だいせん）の代わりに岩手山がそびえているという感じですね。丁度、昭和58年に住宅供給公社で湯沢団地の分譲があって、1番の抽選順位に当たったものですから何となく永住を決め込むこととなったのです。

聞き手 : 久保さんの教会生活を温かく見守ってこられたご主人は、教会に対してはどのような感触をお持ちのようですか。

久保 : よくわかりませんね。信仰は自由だけれども、人には勧めるなという姿勢でしようかね。でも、私に対しては、「教会に行くわりには、信仰が薄いんじゃないの。」などと手厳しい面もあるんですよ（笑）。

聞き手 : 確信がないとか自覚がないとか謙遜しつつも、随分長い間教会生活を送ってこられたんですね。それは、すばらしいことではないですか。久保さんには、何か好きな聖句はありますか。

久保 : どこだったか忘れましたが、「生まれる前から死に至るまで、神さまは常に共にいてくださる。誰も見ていないことでも神さまは見ていてくださる。」という内容のことが書いてある箇所があったと思いますが、そこが好きですね。

聞き手 : 最後に、久保さんにとって現在の内丸教会は、どのようなところですか。

久保 : 出席者が少なくなって、少々、ゆとりや楽しみに欠ける面はあるものの、同じような感覚を持った人々が集まり、嫌な思いをせずにつきあえる居心地のよい場所だと思います。説教もよくわからなかったり、つつい居眠りしてしまうこともあります。礼拝出席を習慣としているだけでも生活に張りを与えているように思います。

聞き手 : きょうは、素敵なお話をありがとうございます。これからもよろしくお祈りします。

久保 : こちらこそ。



(聞き手 : 魚住英昭)

## 荒井献先生の講演「弱さを絆に」から学ぶこと

及川 忠人

第32回カナンの園修養会が7月30日午前に荒井献先生をお迎えして行われた。荒井先生からお話しを聞くことは20年ぶりくらいのことであり、内丸教会が内丸講座として荒井先生をお招きして以来のことであった。

相当前のことであるが、中条和哉先生が大船渡の伝道に情熱を燃やすようになったきっかけは、当時秋田県横手教会牧師をしておられた荒井源三郎先生との出会いであったと伺った記憶がある。荒井先生は、そのご子息であり、岩波新書「イエスとその時代」の著者として知られている。(先生の弟さんは、消化器専門医師になられている。)

チャプレンの中条和哉先生から荒井先生の紹介があったが、それによると、先生は東大名誉教授のかたわら青山学園、恵泉学園学長等をお務めになり、また、礼拝にも欠かすことなく出席されて神様の言葉に耳を傾けようとする忠実な教会のメンバーでいらっしやるとのことであった。さらに、多忙の中でも、NHKの放送においてキリスト教の解き明かしをされるなど精力的な活動をされていて、ある日、たまたま乗り合わせたタクシーの運転手から、「分かり易いお話で、楽しみにして聞いている。」との反応を得て、喜びを感じる反面、キリスト教(教会)はこれで良いのかと疑問を持たれたというエピソードも紹介された。(先生によるキリスト教の説き明かしは、「問いかけるイエス」という著書にもなっている。)

講演では、まず、演題を「弱さを絆に」としたことに関して、遺稿集「弱さを絆に—ハンセン病に学び、癌に生きて」(教文館、2011年10月出版)を遺されたご夫人・荒井英子氏の紹介をされた。それによると、英子夫人は、ハンセン病患者介護施設・多摩全生園内にある秋津教会の牧師をお務めになり、そこでの経験から介護者が被介護者と同一の地平に立つことが出来ないという、「自らの弱さ」を実感されると共に、その「弱さ」によって初めて両者が結ばれるという貴重な経験をされた方であったという。2007年にドイツのベテルを訪問された翌年の2008年1月に卵巣癌を発症、同年3月に手術をするも、2009年に再発、転移。癌の転移再発後も、抗癌剤などによる化学療法を一切辞退し、自然療法に徹する闘病生活をされながら施設の人々と共に過ごされた

という。こうして社会的「弱者」との関わりの中で「弱さを絆に」を強めて行く生涯を全うし、2010年11月ご逝去されたということであった。

続いて、荒井献先生は、マルコによる福音書によって、イエス様のゲッセマネの祈りと十字架の死を中心としてお話をなされた。イエス様のゲッセマネの祈りは、死の「杯」を取り除いてくれるように神に祈願しながら(弱さの極致)、不可避性(神の意志)に身を委ねる行為であったと説明し、師の苦しみに寄り添おうとしながらも3度も眠り込む弟子達(弱さの露呈)に、「立て、行こう」と励ますところにイエス様の存在があると説かれた。

これらの流れの中で、先生は、ユダの自殺についても触れられ、これが実は後世のドグマであったと指摘されている。むしろ、この杯を取り除いて欲しいとする、自分の死への現実の中で、ユダさえも許したのがイエス様の真の姿と考えられるとお話であった。また、十字架の意味をめぐっては、歴史に残る事実性と真実性を区別するべきであると話され、イエス様の十字架を通しての復活が「生きる力」を与えたのは事実であろうと語られた。イエス様は、弟子たちには、「立て、行こう」と話しながら、神には、旧約のヨブと同じように何故私を捨てるのかと迫っているが、先生は、この「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」がこれまでの翻訳においては、「私の霊を御手に委ねます」の意味を抜かしてきたことに問題があると指摘された。(先生が編纂した岩波「新約聖書」では、そうしたニュアンスが加えられている。)。先生によると、こうした強さ(高み)から弱さ(低み)への転換こそがイエス様の十字架の力であり、弱さこそが強いと考える出発点になっているという。また、このことがパウロの復活信仰へとつながり、やがてイエス様を三回知らないというペテロのエピソード(弱さの告白)にもつながるのである。また、先生は、ルカ伝において、最後までイエス様について行き世話をしたのが女性達であったことに注意が必要であるとも語られた。

復活に関する歴史的な事実は、復活したイエス様がペテロの前に顕現し、さらに、コリント15章にあるように500人の以上の人々に会ったというものであるが、この顕現はキリスト者の証言以外にはそ

の根拠がない。

小生は、学生時代に「復活」について、中々理解できないことを、ハンセン病研究者の西占先生に質問したことがある。それに対して、西占先生は、復活信仰への理解はそれぞれの世代においても大きな課題であり、若い世代の者にそれが理解出来ないことがあっても良いと思うと述べてくださったことを印象深く覚えている。

シュバイツァー全集の中に「イエス小伝」という短編がある、その中でシュバイツァーはイエス様の言葉によって打ちのめされるような経験がなければ、これからのキリスト教は成り立ち得ないと述べていた。小生にとっては、ショックであったが、イエス様の示される御言葉にどのように関わり、理解して行くのか、そしてまた、イエス様の復活を如何に自分自身の課題として理解し、受け止めて行くかということは、小生の信仰を見直す上ではとても重要であると思うようになった。

現在、教会の聖書研究祈祷会において共感福音書の同じ内容（並行記事）を参照しながら、共感福音書の歴史的背景や福音書を編纂したころの歴史的背景を学んでいるが、こうした学びを通じて、イエス

様の御言葉が、ほんとうに生きたものとして、自分自身の「信仰のあり方」にせまってくるように思えてならない。

今回のカナンの園の修養会において「聖書の読み方の基本」が荒井献先生のご講演を通して示されたように思う。そのことを今一度学び直しながら、聖書の奥深い御言葉への接近を続けていきたい。



## 『岩手地区信徒の集い』に参加して

小畑孝子

昨年、9月23日（金・祝）、花巻教会において、隔年毎の岩手地区集会在、初めて“信徒の集い”として、「共に手を携えて～福音が響き渡れ、岩手の地に～」の主題で開かれました。18の教会から87名の牧師と信徒が集いました。この集いを通して一番印象を深くしたのは、18の教会の近況報告がすべてそれぞれの信徒によってなされたことでした。3分以内という時間が決められ、内丸教会が先頭に呼ばれました。

私の報告は、おおよそ次の通りです。

「内丸教会は、1年2箇月にわたる無牧の期間を過ごし、その間、教会に牧師が居られることのありがたさを痛切に感じてきました。初めての長い無牧を経験し、教会の全員が寂しさを感じていました。また、一方では、期待に満ちて待つ経験もいたしました。やがて、教会員の熱い祈りに、主は応えてくださり、中原眞澄牧師をお迎えすることができました。みんな喜んで励んでおります。

来る10月2日の主日礼拝には、高校教諭を定年退職したばかりの紳士がバプテスマをいただきます。キ

リストの肢が一人加えられ、数年ぶりに教会をあげて喜びを分かち合う機会となりそうです。

今年度は、『5年後のあるべき教会の姿を』という課題を掲げ、みんなのアンケートをもとにして教会協議会を重ねて成文化し、2012年度より目標を定めて歩むための準備をしております。」

私の報告に続いて、他の教会からも次々に報告がなされましたが、どの教会の報告も主の恵みを数え、感謝に満ちた内容でした。

愛餐会は、各自1品の持ち寄り形式で、初めての試みとなりましたが、出来合いの弁当をいただくよりも教会的で、これからも地区集會では、この方法を継続してほしいと感じました。

教区レベルの集會は、諸教会に所属する信徒にとって、信仰的に交わる貴重な機会であり、これからもできるだけ参加したいと感じました。受けた恵みは、その場限りのものではなく、日々の信仰生活を通して互いに祈り合い、支え合っていける者へと成長させてくれるものであることを確信しています。



## 2011年度 臨時教区総会・教区宣教会議報告

書記 神谷一夫

2011年11月23日(水)午前11時より臨時総会、午後1時30分より宣教会議がキリスト教センターで開催された。

臨時総会では三本木教会の太田望牧師の按手礼が施行された。会場には、太田牧師のお父様の太田光夫牧師も臨席され、感動のまなざしで息子さんの按手礼を見つめておられたとのこと。

宣教会議は、午後から行はれ、2012年度の教区宣教計画案が提示され、全文及び重点目標の説明がなされた。重点目標の1は被災地及び教会の支援、2. 第5期宣教基本方針の総括、3. は第6期長期宣教基本計画の作成、4. 差別をなくす、5. キリスト教センターの法人化等が提示された。各委員から、原発の問題、自殺問題、老人問題、外国人問題等への教区の取り組みについての意見が出された。

第6期宣教基本方針が白戸副議長からあり、10月14日に作成された「教区宣教についてのアンケート」を参考に委員会で原案作成がなされるとのことであった。アンケートは各教会の牧師、役員に配布され、前回のアンケートは回収率30%であり50%の回収を望んでいた。

東日本大震災関係報告が小林岩手地区長より、震災への地区の対応状況の報告、教区の動きに関しては、書記が各地の教会の被害状況、教区としての対応に関して資料に基づいて報告した。

## 2011年度 岩手地区会

第1回 4月29日(金) 水沢教会

岩手地区内の18教会、盛岡大学1の19の団体から、牧師、信徒など議員36名中25名が参加。各教会・大学の報告特に、宮古、新生釜石、大船渡、千厩の震災被災地の状況、及びそれに対する支援に関しての報告があった。なお、宮古教会の森脇牧師は休養のため、新生釜石教会の柳谷牧師も休養のため、それぞれ代理の方が報告された。

2010年度地区活動報告、会計決算、2011年度の地区活動計画、予算が審議され、地区役員選挙も行はれた。2011年度の活動は縮小し、7月大船渡で予定していた修養会を中止、活動費も削減し、被災地教会の

負担軽減と支援金の捻出を図る。なお、修養会は、日帰りの「信徒の集い」を検討することになった。

役員選挙は、地区長 小林 功(北上)、書記 山下光(水沢)、会計 山元克之(花巻)  
伝道 三浦洋一、新田維子(遠野)、教育 山元克之、山崎節子(花巻)、青年 生嶋陽子(土沢)、社会 中原真澄(内丸)、吉川勇三(下ノ橋)、ニュースレター 三河豊、柳沼赦羊子(千厩)、婦人会 松浦祐介(下ノ橋)、会計監査 下川原幸子(花巻)、大西博雄(館坂橋)に決定。



## あとがき

新年を迎えて、季刊うちまる3号をお届けすることとなりました。今回は、多くの方から自発的なご寄稿をいただき、編集者としてうれしい悲鳴をあげています。これからも息切れすることがないように、無理のないペースで発刊を重ねていきたいと思えます。大震災の関係では、復興が進まない状態のまま厳しい冬の季節を迎えている被災者の方々のことを思います。今後の復興と交わりの上に主の導きが豊かであることを願います。

(2012. 1. 8 魚住)



「季報うちまる」編集委員：魚住英昭，神谷一夫  
〒020-0021 盛岡市中央通一丁目6-44  
TEL(622)6688 FAX(622)2565  
日本基督教団 内丸教会 牧師 中原真澄